

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

日本文化と外来思想

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

津田左右吉セレクション2

日本文化と外来思想

書肆
心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

日本文化と外来思想　目　次

シナ思想と日本……………9

日本文化とシナ及び朝鮮の文化との交流……………121

漢字と日本文化……………160

日本思想形成の過程……………173

日本精神について……………191

世界文学としての日本文学——文学の比較研究について——……………208

日本の神道（抄）……………225

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、底本には岩波書店版津田左右吉全集を使用した。

一、漢字は新漢字に置き換え、仮名遣いは新仮名遣いに置き換えた。ただし歴史的引用文と著作名の仮名遣いは（それが純然たる原文であるか否かにかかわらず）もとのままとした。

一、踊り字は「々」のみを使用した（の字点は「々」に置き換えた）。ただし歴史的引用文における踊り字は（それが純然たる原文であるか否かにかかわらず）もとのままとした。

一、読み仮名ルビを補つた。読み仮名の附加が望ましいが、読みを一義的に定め難い場合（例えば、何れ、何人）には読み仮名の附加を避けた。

一、本書刊行所による註は「」で示した。正誤を判断しかねる場合などに使用するママのルビは（）で括り（ママ）と記した。

SAMPLE
Shoshi-Sinsui.com

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

津田左右吉セレクション2

日本文化と外来思想

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

シナ思想と日本

まえがき

ここに収めた二篇に共通な考は、日本の文化は、日本の民族生活の独自なる歴史的展開によつて、独自に形づくられたものであり、従つてシナの文明とは全くちがつたものである、ということ、日本とシナとは、別々の歴史をもち別々の文化なり文明なりをもつてゐる、別々の世界であつて、この二つを含むものとしての、一つの東洋といふ世界は成りたつていず、一つの東洋文化東洋文明といふものは無い、ということ、日本は、過去においては、文化財としてシナの文物を多くとり入れたけれども、決してシナの文明の世界につつみこまれたのではない、ということ、シナからとり入れた文物が日本の文化の発達に大なるはたらきをしたことは明かであるが、一面ではまた、それを妨げそれをゆがめる力ともなつた、ということ、それにもかかわらず、日本人は日本人としての独自の生活を発展させ、独自の文化を創造して來た、ということ、日本の過去の知識人の知識としては、シナ思想が重んぜられたけれども、それは日本人の実生活とははるかにかけはなれたものであり、直接には実生活の上にはたらいていない、ということである。日本とシナと、日本人の生活とシナ人のそれとは、すべてにおいて全くちがつてゐる、というのがわたくしの考である。この考は久しい前からもつっていたものであつて、四十年ものむかしに書いた「文学に現はれたる我が國民思想の研究」にも、歴史上のそれその時代について、そのことが一とおり述べてあるが、その後になつて、それがますますかためられて來た。日本のことを探れば知るほ

ど、シナのことを知れば知るほど、日本人とシナ人とは全く別の世界の住民であったことが、強く感ぜられて来る所以である。

なお世間では、現在の日本とシナとの両国民の間にその文化または文明の交流が行わるべきである、というようなことがいわれてもいるらしいが、もともと文化とか文明とかいわれているのは、国民の生活のありさまなのであるから、その生活から分離して取扱うべきものではなく、取扱い得られるものでもない。従つて、他の国民との交流というようなことは、本来あり得べからざることである。学問的研究の成果とか文芸上の作品とか、または何等かの思想とか技術とか、いう類のものは、「おうそれだけを現実の国民生活から分離して取扱い得られるように見られもしょうが、それとてもほんとうにはできないことである。特にシナが現在の如く共産主義化しているとすれば、学問も文芸も思想も技術もみな共産主義の生活の上に立つてのものその中につつまれてのものであるから、なおさらそうである。現在のシナの社会または国家では、その民衆生活のすべてが共産主義に蔽われているはずであり、従つてその文明は共産主義の生活の現われとして認められねばならぬから、よしその文明の一断片にせよ、それを日本に持ちこむことについては、厳にこのことを警戒せねばならぬ。共産主義化しない前からのシナの文明の遺産としても、今日のシナ人のそれに対する取扱いかたには、その濃淡強弱または多少いろいろの差があるにしても、共産主義の思想がはたらいていることは、同じである。まして日本の過去の文化とシナの昔からの文明とを一つの東洋文化または東洋文明として見るというような誤った考え方たがそれに加わるならば、その影響の及ぶところは至大であるといわねばならぬ。もともと歴史上の事実を明かにするならば、かかる考え方たの謬妄であることは明かであるが、それを明かにしないところにも、共産主義国家の一つの政策があり態度がある。

これまでとて、シナの知識人のうちには、どうかすると、日本には独自の文化が無く、過去の日本の文化はシナの摸倣に過ぎなかつたし、今日のは西洋のに追従しているのみである、というような誤った考をもつてゐるものがあるらしいが、日本人のうちにも、日本の過去の文化の独自性についての十分な理解が無く、それをシ

ナの文明に従属しているものででもあつたようには思ひ、その意味で東洋文化東洋文明という称呼を用いる人たちがあるようには見える。しかしあたくしにいわせると、こういう考は自分たちのたゞさわっていること、好きなこと、またはもつてゐる知識技能などが、シナに由来のあるものであるために、それだけを日本の文物とシナのとのそれそれの、またその間の関係の、全体であるように、鑽賞するところから生じたことである。このほかにもいろいろの理由はあるが、これがそのおもなものであろうと思う。その他の理由というのは、シナ人の実生活を知らず、書物、特にその古典、のみによつてシナのことを考え、儒教の教説や道家の思想などを実生活そのものの表現と見なし、そうしてそう見なすことが事実そうであつたことを示すものの如く、思つて來た昔の学者の気分が遺存していること、また今の一般の知識人の知識が、主としてヨウロッパ人またはアメリカ人から与えられたものであるために、シナの事情やシナと日本との関係については、知るところが少かつたり誤つたりしていることなどが、その主なるものである。それで、日本の文化についてもシナの文明についても、そのすべての方面を見わたし、それをそれ全体として觀察し、またその根本の精神がどこにあるかを究め、それと共に、日本人とシナ人との現実の生活状態とその生活感情生活意欲とを、ありのままに見るならば、そういう考はおのずから無くなるはずである。それを明かにしようとするのがこの書を公にした一つの意味であつた。この書の原版の「まえがき」で、「日本人が日本みずから文化とシナの文明とに対して、……正しい見解をもつことの必要が、今日ほど切実に感ぜられる時は無い、もしその見解にまちがつたところがあり、そうして、そのまちがつた見解にもとづいて、何等かのしがくが企てられるようなことがあるとしたら、そのなりゆきには恐るべきものがあろう、と気づかわれる」と書いておいたのも、このためであつた。これは、今日では一層深い意味をもつことではなかろうか。

原版の「まえがき」では、なお、日本人は、日本のことばをよくするために、できるだけ早く、シナ文字をつかうことをやめてゆくようにならぬこと、いわゆる漢文と結びついている過去のシナふうの学問のしかたや事物の考え方たは、現代文化の基礎である現代の学問の精神および方法と一致しないものであるから、独

立の漢文科は普通教育の教科からは除かねばならぬこと、また日本人は、現実の国際関係の上からも純粹な学問の立ちばからも、シナの文明に対する厳正な學問的研究と批判とをつとめねばならず、例えば政治の道を説き道徳を教えるものとしての儒教が、權力者や知識人の知識の上思想の上では、長い間大なる權威をもっていたにかかりわらず、それによってシナの社会と政治とか少しもよくならず、シナの民衆が少しも幸福にならなかつた、といふ明かな事實の如きも、かかる研究と批判とによつて始めてその理由が知られること、などを述べておいたが、これらは今日かえつて強く主張すべきことであろうと思われるから、ここにこのことを書きそえておく。現在のシナが共産主義の甚だしき抑圧を蒙つてしながらそれを排除することができないような状態に陥つているのも、儒教の上記の事情と深い関係のあるべきことが推考せられるから、日本のためにもシナのためにも、また世界の文化のためにも、日本人はこのことを明かにしておかねばならぬ。現在のシナは、ソ聯に倣つて、政治についても社会生活についてもまた道徳思想についても、為政者の權力によつて過去の伝統を破壊し去らんとしているので、そこに上にいつた共産主義化があるが、シナの知識人にはもともとソ聯の政治を摸倣するに適する素質がある。彼等は過去に於いて武力を背景とする政治上の強権には何時でも服従し、或はそれに迎合し、それによつて何等かの地位をその間に占めようとした。昔から王室の更迭が正当視せられて來たのは、これがためである。また思想の上に於いては、道徳を帝王の定めるものとし、帝王の設けた礼樂制度によつて士民の思想と行動とを厳格な規矩に従わせることを理想とする、儒教を信奉した。これはソ聯の企てもし実行もしていることと同じ考え方から出たものである。シナがソ聯化し得る一つの理由がここにあることは、容易に感ぜられる。シナ人はその実生活に於いては極端な自我主義者であるが、それでありながら、知識人の思想としてはこういう一面があつて、それが互に絡みあつてゐる。(ソ聯の為政者の權力が帝政時代の帝王の權力とそれと一体になつていたギリシャ教の教權との形を変えた継続であるのも、このこととながりがあろう。すべて革命の一面には、旧来の状態への依存がある。それが無くては革命はできない。)

昭和三十四年三月

著者

一 日本はシナ思想を如何にうけ入れたか

1 緒 言

日本人がシナ思想を受入れたのは一時だけのことではない。長い日本の歴史を通じて断えず行われていたことである。勿論それは、シナ思想そのものがその本土たるシナに於いて断えず変化し発達していく、それがその時に一々日本に伝えられた、という意味ではない。シナ思想は、上代に於いてそれが一旦形づくられたのちには、大なる変化も進展も無く、殆どそのままに後世までうけつがれた。シナの社会が固定しシナの文化が固定していた如く、またそれに伴つて、その思想もまた固定していたのである。こまかく考えればいろいろの小さい変化が無いではないが、全体としては、或は根本的には、後世も上代も同じである。その小さい変化が或る時間を隔てて次第に日本にも伝えられ、そうしてそれが日本の学者を動かし、また間接には一般の思想界にいくらかの影響を及ぼしもしたが、それよりも重要なことは、そういう後世の変化に關係なく、古い昔に伝來した同じシナの古典の知識、それに現われている同じシナ思想が、いつまでも日本の知識社会に大なる権威を有つていて、一面からいえば、それが国民生活の歴史的發展につれてその思想界に断えず何ほどかの刺戟を与えたと共に、他面からいえば、それが常に日本人の思想を束縛し抑圧しその發展と深化とを妨げたことである。シナ思想の淵源が一定の古典にあり、日本人のシナ思想を知るのは後世までも主としてそれによつたのであるが、その古典は宗教的といつてもよいほどに尊重せられ、それに万世不窮の教が存する如く考えられたからである。日本に伝えられたシナ思想は儒教が主になつっていたのであるが、それは人の道を説くものであつて、その道を学ぶものにはそれを実践することが要求せられ、従つてその説くところの道が絶対の権威を有するものとして教えられたので、その意味に於いて一種の宗教的性質を有つてゐた。シナ思想を遵奉し宣伝するものは固よりのこと、然らざるもの

のもまたそれを準拠とするのであるが、シナ思想に反抗しそれを敵視するものとて、またその主張の根柢には、かかるシナの古典によつて与えられた知識が潜在し、それに制約せられている。だから日本の知識社会では、いつの代でも同じシナの古典、同じシナ思想が権威をもつっていたのである。シナ思想が断えず日本に受入れられてきたといふのは、その意味に於いてである。日本人の思想、日本人の生活に、それが如何なるはたらきをしたかは、問題の存するところであるが、これだけの事実は看すごすことができない。過去に於いて日本人の使つた文字の一半がシナ語を写したシナの文字であり、文字そのものにシナ思想が宿つているということだけを考えても、日本人の思想に多かれ少なかれシナ思想がつきまとつていたことは知られよう。だから日本人がシナ思想を受入れたことは、日本思想史の一側面をなすものであるといわねばならぬ。

しかしかる歴史を歴史として叙述することは、勿論ここではできない。またシナ思想がシナ思想そのものとして如何に学習せられ如何に講説せられたかということ、例えは儒教の学に於ける日本の儒者の学習の状態やその業績というようなことも、問題の外に置く。ここではただシナ思想が日本人によつて如何に取扱われ日本人の生活に如何なるはたらきをしたかということを、一二の重要な点について略説しようとするのみである。

2 シナ思想の概観

シナ思想の受入れかたを考える前に、シナ思想の何であるかを一おう吟味して置くのが、順序でもあり便利でもある。が、既に述べた如く、シナ思想には後世の変化が少いからここにはそれがほぼ一定の形を具えた時代である漢代までの典籍に現われているところを主として述べることにする。それが、大体、後世までうけつがれているものである。

シナの知識社会に発達した思想の特色として先ず考えられるのは、すべてが直接に人の現実の生活に関係のある、いわば実際的の、問題に集中せられているということである。道徳か政治か、然らざれば処世の術、成功の法か、あらゆる思慮は殆どみなその何れかについてである。儒家の説くところが道徳と政治とに関するものであ

ることはいうまでもなく、墨家、即ち、墨子の説を継承したと称せられる学派、もまたそうであるが、処世の法もまたそれに絡まつてゐるので、後にいう如く、特に政治の術に於いてそうである。また道家、即ちいわゆる老莊、の思想は保身の道、成功の法、もしくは治民の術であり、法家と称せられている学派の思想も、また君主のために如何にしてその権力を強くし如何にしてその臣下や民衆を使役し駕御すべきかを説いたものであつて、畢竟、等しく処世の術である。シナ人ほど人に対する法、人を利用して人を御する術を考え、そうしてそれを説きそれを教えたものはあるまいと思われるが、そういうことが注意の焦点となつてゐるところにシナ思想の特色がある。そうしてこのことは、シナ思想がシナの特殊の政治形態、特殊の社会組織、またシナ人の特殊の生活、特殊の心理、を離れては意味の甚だ少いものであることを示すものである。実際の生活状態に適応するものとして説かれたところに、道徳や政治や処世術の意義も価値もあるからである。勿論、教として説かれたことが、実際世に行ひ得られるものであるには限らず、儒家や道家の主張には現実から遠く離れた空想的なものが多いのであるが、そういう空想的な考のものが実は現実の生活状態から生れたもの、シナの知識社会に特殊な思弁によつて形づくられたものなのである。政治や道徳に関する思想は、如何なるばあいでも、その思想を生み出した時代もしくは民族の政治状態社会状態を根拠として形づくられているのであって、例えばプラトンの国家観、アリストテレスの政治観が、当時のギリシャの政治の実際を離れては解しがたいものであることはいうまでもないが、学説としての理論を立てるのが主旨ではなく、直接に現実の政治を指導し道徳を指導しようとしたものであるところにシナ思想の特色があり、従つてそれは普遍性の甚だ乏しいものである。シナに於いては、政治形態も社会組織もその間に於けるシナ人の生活状態も、後世まで大なる変化が起らなかつたために、上代に形づくられた政治や道徳の教が、知識社会の思想としては、長く権威を失わずに持続せられたのであるが、それは他の民族に適用せらるべきものでないのみならず、思想として理会することすらシナ以外の民族には甚だ困難なものである。

勿論、シナ人の思慮とても、上記の如き問題の外に全く出ていないということはできぬ。政治や道徳の思想の一とおり形づくられたよりは遙かに後れて現われたものではあるが、陰陽説五行説の如きものがある。陰陽説と

は、宇宙に陰気と陽気とがあって、その配合や消長循環によつて天地方有が成り立ちもし運行もするという説であり、五行説とは、木火土金水の五つの気のはたらきによつてあらゆるものが生々変化するという説である。また老子の書及びそれから発展した道家の思想に於いては、民間說話から取つた宇宙生成説、即ち太初の渾沌から天地万物が分出したとする説、に特殊の意義を与えてそれをその主張に結びつけてある。儒教の仁義というような名を去り道をするところに真の大道があるとする道家は、天地万物がまだ分れずして名もなく形もなかつた宇宙の太初の状態をその大道の象徴と見たのである。道家は常に天を説き自然を説き人はもともと天と同じものだともいつているが、それは、人が智を用いたり情意をはたらかせたりすることを無益有害であるとし、天と同じ無為であり自然であることによつて身を保ち事を成すことができる、とする主張のためであり、その意味でまた人の心も道も宇宙の太初の渾沌と同じだとも考えた。また陰陽説五行説に關聯して、天文や暦の知識が発達したと共に、いくらかの形而上学的思索も行われた。が、陰陽説はすぐに実用的な養生の思想や占筮の術たる易に結びついた。養生とは無病長寿を得ることであるが、人が生きているのは肉体に伴つてゐる陰陽の気のはたらきによるとせられ、従つてその気をととのえるのが養生の道の主要なることとせられたのであり、また易と名づけられた占いの法は、卦という形象によるのであるが、その卦は爻といわれる――と――との二つの線のくみあわせによつて成り立ち、そしてその爻の二つの形は陽と陰とを象徴するものとせられたのである。それと共にまた陰陽説は、五行説と相並んで、或は結合して、政治思想に織りこまれたので、春夏秋冬の四時にはそれそれ特殊のはたらきがあり、天子の政令は時季によつてそのはたらきに応ずるものでなければならぬという時令説とか、または天子に徳が無く政治が正しくない時には水旱などの災が起るという災異説とかは、その最も顯著なるものであり、陰陽を調和するのが天子の任務ともせられた。陰陽を調和するとは四季の循環が規則的に行われ風雨寒暖が適度であるようにすることであつて、それは天子が徳を修め政を正しくすることによつて得られる、というのである。漢代の儒教が陰陽説を取り入れたのはこれがためである。五行説からはまた別に王朝更迭の事実の一解釈としての五徳説も生れた。王朝は木徳とか火徳とかいう五行の徳の一つを具えているので、王朝の更迭はその

五行の順序に応ずるものである、という説である。また天文や暦の知識は占星術から離脱せず、或はむしろそれに含まれている占星術的意義を拡大しつつ発達し、そうしてそれがやはり政治思想化した。いくらかの形而上学的因素も、政治もしくは道徳の思想の根柢としてなされたものであり、またその反映として解せらるべきものである。

然らば、その政治や道徳の思想は如何なるものであるか。それについて第一に注意せられるのは、すべてが人を本位とし人に始終していることであって、この意味に於いてシナ思想は非宗教的である。道徳は人の道徳であつて神の関するところではなく、世界の道徳的秩序は現実の人生に於いて保たれるとするところに、シナ思想の特色がある。政治の特に尊重せられることにもそれが現われていてるので、政治的君主たる帝王は道徳的律法を作るものであり、更に一步進むと宇宙を統制するものもまた帝王であるように考えられて来る。帝王に徳があり政が正しければ日月星辰の運行さえも正しくなるというのである。シナ思想に於ける帝王は多くの民族の思想に於ける神の地位を占めるものである。これは主として儒家の思想についていったのであるが、道家でも法家でも非宗教的である点は儒家と同じであり、或はむしろ儒家よりも徹底している。ただ墨家の思想は少しく趣のちがつたところを含んでいるが、全体から見ると、やはり同じ考え方たが主になつてている。ところで、非宗教的な精神はおのずから一種の合理主義的傾向となつても現わるので、シナ思想の一面にはこういう傾向が存在する。勿論、シナにも民間信仰としての宗教はあって、一般人の生活がそれによつて支配せられていたのみならず、知識人ともその実生活に於いてはかかる宗教から離脱し得たのではなかつた。彼等とともにまた人力以上の何ものかに依頼する情を無くすることはできなかつたからである。儒家が、例えば喪祭の礼に追孝の義があると説いたりそれを天地の秩序に応ずるものとしたりしたように、宗教的儀礼に道徳的政治的意義を附与し、或は魂は気で軽いから天に帰するというように、それに合理的な解釈を施そとしたのは、それと彼等の主張との妥協策であつた。天というものを、一方では自然の理法というような意義に用いてそれを合理化しつつ、他方ではそれに神としての宗教的意義を保有させたのも、また同じ考え方たであつて、天の觀念は民間信仰に遠い由来はあるも

の、それを特に尊重しそれを発達させたのは知識人の思惟に於いてである。儒教そのものさえも一種の宗教的色彩を帶び、人であるべき聖人が殆ど神視せられるのみならず、宗教的儀礼を以て祭祀せられ、その經典が信仰的态度を以て崇拜せられるようになつたことをも考えねばならぬ。漢代に於いては儒家が種々の形に於いて災禍を去り福利を求めるることを説いたので、上に述べた災異説の如きもその一つであるが、この傾向は要するに儒教の政治説道德説と宗教思想との奇異なる結合であつた。老子が宗教的に崇拜せられ、またそれが神仙説に結びつけられ、そうして仏教の刺戟をうけて民間信仰を組織だてたものというべき後の道教に吸收せられるようになつて來たことも、また考え合わせられよう。神仙説とは人の身のまま長生不死であるといふ仙人の存在とそういう仙人になり得る方術のあることとを説くものであるが、老子は神仙家によつてその仙人とせられ、また神仙説をとり入れた道教では仙人としての老子をその教主とし、仏教の教主である釈迦に対立させたのである。人の道徳を人の道徳としてたてようとするところに特色のあるシナ思想は、かくしてその本色を失うようになつて來たのであるが、しかし宗教としてはどこまでも災を去り福を求めるための祈禱や呪術であるので、道徳とも政治とも無関係であり、従つて両者の結合は外面向の混淆に過ぎない。

しかし道徳や政治の教がこういう程度の宗教思想とこういう状態に於いて結びついたのは、決して偶然ではなく、本来、その道徳説政治説に於いて人の肉体的物質的欲求を充たすことが基本として考えられる傾向があつたからである。そうして肉体的物質的欲求が肯定せられる上は、名利慾權勢慾もまた従つて是認せられて来る。儒教道德の根本とせられる孝は、孝經によれば、身を保ち家を保ち祿位富貴權勢を保つことであり、王道の綱紀とせられる礼は上記の欲求を正当視し一定の外的秩序によつてそれを規制するものである。道家はかかる欲求を離脱すべきことを説くのであるが、それも畢竟^{ひょくいん}身を保ち生を保つがためであつて、欲求をすることによつておのづからその欲求が充たされる、とするのが主旨である。戦国末から、世に現われた養生の説や隱逸の思想も、またこの意味に於いての道家の説とそれ一致するところがあり、或は相関するところがある。養生の説が肉体的生命を保つ道を講じたものではあることはいうまでもなかろうが、隠逸の思想も、また權勢名利の地位から去

ることによつてその地位に伴う危険から遠ざかる、という意味に於いて身を保つ道である。またかの神仙の説が肉体的生命を無限に延長せんとするものであり、人生の快樂を無期に享受しようとする欲求から出たものであることは、明かである。ところが、かかる欲求とその享受とはすべて自己に関するものであるから、神仙説や養生説は勿論のこと、保身の道たる隠逸の思想も上記の道家の保身の道も、畢竟、自己本位の考え方たであり、一種の利己主義である。自己をすべて外物に順応せよといふ道家の他の主張も、また保身の道であることに於いて同じである。柳の枝に雪おれなしという意味である。人に対し世に處する術を考えることが自己を立てるためであることは、いうまでもあるまい。人倫の道を説く一面に於いての儒家、權力階級に属するものをして庶民を愛せしめようとした墨家は、利己主義を是認したのではないはずであるが、儒家の孝の説は実践的には、畢竟、利己主義に墮するものであることが、上に述べたところからも知られるし、墨家の説とても他を愛することは即ち他をして己を愛せしめることになるというのであるから、そこにやはり利己主義がある。仁を説き義を説きました愛を説く儒墨の教に於いてすら、こういうことをいわねばならなかつたところに、重要な意味があるのであり、そうしてそれは主として社会組織が散漫で人の生活に於ける社会連帶の觀念が無く、従つて社会意識が発達しなかつたところに由来があろう。集団生活とその意識とを有たなかつたことは、いうまでもない。シナ人の道徳は、例えれば父子君臣夫婦といふような特定の関係のある個人と個人との間にのみ存するものとせられ、社会もしくは集団の全体に対する道徳のあることは、全く考えられなかつたが、これもまたそのためである。シナ人にとっては、自己の広い意味での自己である家族との外には生活が無かつた、といつて大過が無い。後世になると、權勢と利欲とをすることを尚ぶ道家の一面または隠逸の思想と関聯して、風月を友とし山水を愛翫する特殊の趣味が発達し、神仙の説に於いてもまた、長生の欲求そのものよりは長生を得る方法として説かれた權勢欲名利欲や享樂欲からの離脱が関心の点となつて、この趣味に結合せられたのであるが、それとても、主觀的には自己の安易を欲するに過ぎないのであるから、畢竟、消極的な利己主義に外ならぬのである。

シナ人の道徳思想は儒家の教説によつて代表せられている觀があるが、実践的にいふと、その最も主要なるも

のであり道徳の根本とも基礎とも考えられたものは、シナに特異なる家族制度と社会組織とから生まれた孝の教であり、その他の家族間の道徳がそれに附隨して説かれていた。シナ思想に於いては家族生活が殆ど生活の全体とせられ、従つて家族間の人倫関係を規定する道徳が道徳の全体であり、家族関係の外には殆ど道徳のあることが認められなかつた、といつてもよいほどである。家族外に於いてはただ君臣の関係のみが重んぜられたので、戦国時代からは、孝の外に孝と並んで、君に対する臣の忠が説かれるようになった。しかし、君臣関係は親子のそれとは違つて自然には存在せず、君から禄を与えられてその君に仕えることによって始めて生ずる特殊なものである。さて孝は天子から庶人、即ち一般民衆、に至るまですべての階級を通じての道徳とせられていたが、何ことが孝であるかを具体的に説くばあいには、一般民衆は殆ど問題外に置かれていた。忠に至つてはその本質として禄を得て君に仕えるもの、即ちいわゆる士大夫の身分のものに特殊な道徳である。臣たるもののがみずから君主との関係を絶ち禄をして民間に隠れることができ、またそれが臣の道とせられるばあいのあるのも、この故である。君臣関係は臣が禄をしてることによっていつでも断ち得るものである。全体に儒教の思想では、一般民衆を禽獸と同視し、道徳を以て律すべからざるものとしていたのであるから、民衆には何等のかかわりのない君臣関係が人倫の重要なものとせられたのも、怪しく述べ足らぬ。道徳はそのすべてが士大夫の道徳なのである。また孝悌や忠の教によつて知られる如く、儒教道徳は卑賤者が尊貴者に対し服事することを主とするものであるが、これは人と人との関係がすべて貴賤尊卑の秩序に於いて考えられ、かかる秩序が人と人との関係の本質と見なされたからである。儒教に於いて尊重せられた礼というもののこの秩序をいうのである。従つて儒教道徳はおのずから尊貴者権力者の地位と勢威とを擁護するもの、従つて彼等の欲求を正当視するものであるので、孝と忠とは子たり臣たるものに対して親たり君たるもの欲求するところである、とさえいわれていた。儒教の道徳がこういうものであるとすれば、それを維持してゆく方法が、帝王の定めた礼によつて外部から規制を加えることにある、とせられたのも当然である。一方では孔子の実践的教訓に源を発した孟子のような考え方たもあり、良心というような語も作られて來たので、それは心の修養を主とする点に於いて道家の一面の思想とおのず

から相関するところのあるものであるが、上代に於いてはそれはむしろ重要視せられなかつた。ただ後世になると、道家及び仏教から刺戟をうけてこの一面が重んぜられるようになり、それによつて特殊の教説が展開せられたので、宋儒の学が即ちそれである。

問題はおのずから政治思想に移つて來たが、シナの政治思想はすべてが帝王本位であり治者本位である。帝王のために如何にして民を治むべきかを説くのが政治の学であるが、民衆にはみずから生活するだけの能力が無く、彼等の生活は一に帝王に依存するものとせられ、帝王の行為が民衆の生活のすべてを支配すると考えられた。そこに帝王の道徳的責任の説かれる根拠があり、一方では帝王には徳が無ければならぬとせられると共に、他方では道徳的意義に於いて民衆を教化する責任があるともせられた。民を教化し得るほどに帝王の力は無限であるとせられ、孝の如きも帝王の教によつて始めて行われるものと考えられたのである。そうして実際、古にはそういう教を立てた帝王があつて、その教が行われ道が行われていたように思われた。さて帝王の徳は民衆の服従することによつて示されるのであるが、民衆は自己の生活を妨げる帝王に離叛して妨げない君主に依附するものとせられたので、そこから、帝王の徳は民衆の生活のできるような政をする、即ち仁政を施す、ことに於いて現われるのであり、そうしてそれが即ち自己の地位を得もしくは保つ方法である、という思想が生じた。有名な孟子の王道論の精神はここにあるので、それは即ち王朝の更迭を正当視し、天命説革命説を以てそれを理由づける尚書（書經）の思想の展開せられたものである。天命説とは、帝王の位は天の命によつて与えられるものであり、その天の命は民衆が服従することによつて示されるという説であるが、帝王に徳がなくして民衆がそれに服従しなくなると、^{あらん}新に民衆の服従するものにその位が与えられるので、それが即ち天の命の革まるのだと考える点に於いて、この説はまた革命説と呼ばれる一面をもつものである。また礼樂制度を定めて天下の秩序を立てることが天下を治める所以であつて、それが帝王の任務とせられ、そうしてそれが即ち教化の目的でもあり方法でもあるよう説かれているが、秩序を定めることは即ち権力関係を固定させることであるので、従つて天下が治まるということは即ち帝王の地位が確立することである。要するにシナの政治思想は、畢竟、帝王の権威を立て

ることに帰着するのであり、従つていつの世にも帝王に利用せられたものである。ただその権威の根拠が帝王の徳にあるとせられたところに儒教の特殊の思想があるが、それは実際政治の上には殆ど実現せられたことの無いものである。災異は言説の上で帝王の不徳の徵とせられたのみであるが、祥瑞は帝王を讃美するために常に造作せられていたことを考へるがよい。祥瑞とは、聖天子が上にある時、よき政治の行われる時に、例えば麒麟とか鳳凰とかが出るというように、常には無いものが世に現われるとせられたその異常の事物をいうので、事実としては存在しないものが多い。これは主として儒家の主張であるが、上に述べた如くそれは治者の地位に立つての考であるので、民衆の思想ではない。民衆は帝王に何等の依頼するところも無く何等の関心をも有たず、初めから帝王の存在などを念としないのであるが、ただ帝王の如き権力者の権威が自己の頭上に加えられることをば欲しない。孟子の王道論の根拠となつた眞の事実は、戦国混乱の際に於いて、民衆が自己に加えられる権力の迫害の少しでも軽からんことを希望するがために、彼等の上に臨んで来た権力者に早く服従の意を表すするという習慣に外ならなかつた。なお道家が無為の治を説いたのも、その根本は儒家の説と同じであり、無為にして治まるとするところに帝王に無限の力のあることが認められ、かくして民の治まるのは即ち帝王がその地位を保つ所以として考へられたのである。ただ道家の政治説は、その自然の帰結として民衆に権力の威圧を感じさせないことになる点に於いて、おのずから民衆の要望と契合するところがあるけれども、帝王のために政治の術を説いたものであることは、儒家のと違はない。儒家や道家の政治思想はこういうものであつたが、それはシナの政治形態が帝王と民衆との間に支配者と服従者との権力関係が存在するということに過ぎないものであることと、民衆はただ彼等みずからの生活の外に何等の関心をも有たないものであることに、由來がある。シナには初めから現代的意義に於いての国家は形成せられず、従つてその民衆は一つの集団としての国民をなすものではなくして、ただ人々が個々に帝王の権力に服従しているのみである。革命説の生じたのもここに由來があり、帝王の権力の及ぶところに境界が無く、帝王が世界の君主を以てみずから任じていたのも、ここに一つの根拠がある。

ところで、政治的にはすべての世界が一つの天下としてシナの帝王の権威に服従するものとせられながら、そ

の間に中国と夷狄との分界を設け、夷狄は中国に服属するものとせられたのは、その根柢に民族的自尊心もあるけれども、それよりも文化的意義の方が主になつてゐるらしく、民族的自尊心とても自己の民族の文化を誇るところに重きが置かれているのである。これは東方アジアの状態として、種々の民族があるけれども、文化の発達しているのは独りシナ民族があるので、その他はみな未開民族である、という事実に基づがあるのである。しかしシナ民族の誇りとするその文化は、実はシナの権力階級の文化なのである。道徳の教も政治の思想も、畢竟、権力階級の権威を保護するものであるが、それは知識社会が政治的権力の従属者として発生しました存在したからであつて、それはまた一般的な文化が権力階級の占有であつたことを示すものである。学問や文芸は全く権力階級のものであつて民衆のものではなく工芸技術とともに同様である。解し難く用い難い煩雜な文字の行われたのも、文字が民衆のものでないからである。儒教というようなものが民衆には何の関係も無いことは、勿論である。ところが文化が夷狄に対しても中国の、民衆に対して権力階級の、誇りであるとすれば、権力階級と中国とはその文化を失わないように保持しなければならぬのであるから、そこから保守主義が生れるのみならず、それはまた尚古思想の形成せられる一因ともなる。現代を非として古を尚ぶのと現状を保守しようとするのとは反対の考であるけれども、同じく過去を尊重する点に於いてその間に相通するところがあり、また文化の由来が古いと考えることがその文化の誇りを加える所以であつて、そこにも尚古主義的一面がある。この保守主義はおのずから権力者がその権力を保とうとする欲求と相伴うものであつて、そこに礼の観念、秩序の観念、と一致するところがあるが、秩序の固定を欲求することは、またシナの知識社会に一種の機械観的世界觀の發生した一事情ともなつたらしい。陰陽説も五行説も宇宙を機械的に觀るものであるが、それは合理主義的人生觀と相應するものもあり、シナの自然界の状態、特に四季の循環のほぼ規則的なことから誘われたものもあり、また日月星辰の運行に一定の法則のあることがわかつてゐた天文の知識によつても助けられてゐると共に、秩序の固定を欲求する思想の反映でもあるからである。そうして、こういう世界觀はおのずから人を自然物と見なし一般の生物と同視することとも関係がある。シナ思想に於いては自然が至高至美のものとせられているが、これは一方に於いて人の道徳を

も自然に存するもの、または自然の理法から派生したもの、それに摸して定められたものとする考を導いたと共に、他方に於いては人を自然物と見なす見かたともなつて現われたので、後者は人の肉体的欲求の満足を肯定する思想と一致するものである。道徳を説くものは何等かの意味で、人の自然に対する特殊の地位、自然と異なるところのあることを、認めねばならぬようであるが、シナ思想に於いては必ずしもそうではないので、道徳を説く儒家に於いても、漢代以後には、人はその本質に於いては天、即ち自然、と同じであるから、人のうちに存するこの自然を失わないようにするのが人の道である、と考えるようになった。これは実は儒教の道徳を人為のものとして却け人の人としてはたらきを否定する道家の説に主なる由來があるので、それがために道徳の基礎を薄弱にしたものであるが、ともかくもこう考えられるようになつた。天人の合一を説き天と地と人との相応をいうのも、天または天地、即ち自然、と人とを同じものと見るからのことである。

然らばかかる思想は如何なる考え方によつて考えられ、如何なる説き方によつて説かれて来たのであるか。言議を好み論弁を好むのがシナ人の性癖であるが、それは外に向つて自己を主張し他を説服せんとするところに本色がある。彼等は思索に長せず、反省と内觀とを好まない。対するものの心理の機微を捉えて我が言に聴従させようとする方に力を尽しても、思惟を正確にする方法は考えられず、論理の学は微かにその萌芽を見ながら成長せずして早く枯死し、却つていわゆる弁者の弁の如く真偽是非を没却する詭弁の術がそこから発達した。弁者といふのは、ものごとの真偽是非に一定の準則はなく、すべては考え方次第いいよう次第であるとして、一種の警句めいたいきかたでさまざまにそれを論弁したものである。いくらかの形而上学的思索を試みた道家の所説も、半ばは詭弁に墮している。言説の多くが他に対するものであり実行上の目的を有するものであるから、その思想は概ね断片的であつて、組織と統一とに欠けている。或はまた自己の主張しましたは要望するところを恰も現実に存在するものの如く考え、それを根拠として理説を立てるのがシナの思想家に通有な態度であつて、儒家や道家の説が空疎に流れているのはそういうところに一つの理由があるが、それは実は実行を要求する道徳や政治の教であるからであつて、畢竟、同じところに由来がある。実行を要求するところから、自己の主張

を主張することにのみつとめ、それが実行し得られるかどうかを現実の事態そのものについて考えないのである。一体にシナの思想家は、啻ただに反省と内観とを好まないのみならず、客観的に事物を正しく視ようとつとめることが無い。なお彼等の思惟のしかたを見ると、それは多く聯想によって種々の觀念を結合することから形成せられ、その言説は比喩を用い古語や故事を引用するのが常であつて、それに齟齬と矛盾とがあるのも、相互に無関係な、或は相反する、思想が恣ほしに結び合わされているのも、これがためであるが、今人の眼から見てそういう論理的欠陥のあることは、シナの学者には殆ど感知せられていない。或はまた五行説などに於いて最も著しく現われている如く、一定の図式にあらゆる事物をはめこむことが好まれるが、これもまた、一々の事物の本質を究明せず、何等かの類似点をその外觀に求めるこことによつてそれらを結び合わせるのであり、畢竟ひつきよう同じ考え方から來ている。(五行説では、五方五声五色五味五臟などの五の数で數え得られる種々の事物について、それらの一つ一つをそれそれ五行の一々にわりあて、そうしてそれらがみな五行の氣の何れかを具えているものと説くので、上に述べた帝王の徳としての五徳もその一例であるが、すべてが無意味の附会である。)シナ人の考え方たに直觀的な点があるようにいわれてもいるが、それは彼等の思惟が論理的でないことに惑わされたのである。ここに記したような思惟のしかたと、次に述べるようなそれに応ずるシナ語の表現法とから、論理的思惟に慣れている現代人にはそう見えるばあいがあるかも知れぬが、その実、シナ思想はシナ人に特殊な方法による理説から成り立ち、その理説は事物の表面上の知識を外面的につなぎ合わせるところにその特色がある。実践を目ざす教でありながら常に現実から離れ、或はそれを無視しているのも、一つはこういう思惟のしかたから來ていよう。思惟が極めて放縱になり、或は強いて一定の型にはめこまれるからである。彼等に批判的精神が無くその能力が無いのも、論理的な頭脳が無いのと現実を直視し事物の本質を究明することができないことに、重要な理由があろう。ところが、これは彼等がその思想を表現しましたそれによつて思惟するシナ語の性質にも関係があるので、名詞も動詞も形容詞もその形に区別が無く、また同音異義の語が多いために、語の意義が混乱し易く、語と語との関係が曖昧であるために思想の運びが明確を欠き、語と語とを羅列することによつて觀念から觀念へと無

統制に移りゆき、自由に熟語を作ることによつて無関係な観念を恣^{ほし}につなぎ合わせることなどは、上記の思惟のしかたと相応するものであつて、互に因果をなしてゐるのであろう。シナ人が智を弄し言を弄し修辞によつて思想を迷惑させるのも、老子の書に見える如き逆説的表現法を用いるのも、或はまた詭弁の行われ易いのも、かかる言語の性質に由来するところが多い。要するにシナ語は論理的な思索には適合しないものであり、寧ろそれを妨げるものである。（但しシナの詩の有する特殊の情趣はこのシナ語の性質によるところが多い。）だから、一旦シナ思想が或る程度に形成せられた後は、博覧強記であり文字上の知識を多く有つてることが学者の任務とせられたので、それは古典の文字によつてはなればなれにその意義を解釈してゆくのみであつて、全体の精神を理会しようとしたい経典の学習法を見ても知り得られる。いくらかずつの新解釈は施されてゆくが、それとても、古典そのものの意義を討究するのではなくして、自己の何等かの知識を古典の文字に結びつけることであり、その結びつけたは極めて放縱なものである。そうしてこの点に於いても、言語が不精確であるために、如何なることをもそれに附会し得ることを考えねばならぬ。

以上はシナ思想とシナ人の考え方との大觀であるが、こういう思想の形成せられた上代に於いては、具体的にはおののおのの見解を異にした種々の主張があつたことはいうまでもない。しかしそれらは、概言すると、上記の如き根本の思想がいくらかずつ考え方を異にし、或は方向を異にして、現われたものとすべきである。こういう異なる思想はおのずから、それぞれの学派として伝承せられるようになつたが、その思想は実践的意義を有するものであるから、その伝承も單なる学派としてではなく、半ば宗教上の宗派に似た性質を有つてゐるので、儒教が宗教的色彩を有するようになったのも一つはここに由來がある。勿論、伝承の間に或る程度の発展もあり、または種々の学派の主張が相互に影響を及ぼし、或は結び合わされることもあつたので、同じ学派の主張が常に同一であつたのではない。ただ学派として互に対立するに当つては、自然の傾向として、自ら守り他を排するようになるので、そこでいわゆる「道」^{あそい}の争が起つて来る。道の語は人の歩む道路の義から一転して人の遵奉すべき道徳的規範の義となり、再転して、一方ではそういう規範に関する自家の主張を意味することとなつて「我が

道」という観念がそこから生ずると共に、他方では人の道の本源としての自然の理法、あらゆる事物に内在する法則、宇宙の存立する原理、もしくは宇宙の生成に於ける太初の状態、などを意味することにもなったのである。この最後の「道」は道家の思想に於いて特に重要な意義を有するので、いわゆる渾沌がそれである。そして、種々の学派がおのその主張を宣伝するばあいには、互に我が道を他の学派の道よりも優つたものとしなければならぬので、そこから道家の「大道」の如き語が作られるようにもなつた。これは儒家に反抗して起つた道家がその道を儒家の道よりも優位にあるものとするところから出たことである。さて、こうして互に争つていた種々の学派は、漢代に至つて儒家の学が官学となり官吏登庸の基準とせられるに及んで、おのずから解消するようになつた。知識社会の思想が儒教によつて統一せられたからである。但し学派は解消しても儒家以外の思想がなくなつたのではなく、その多くは、一面に於いては儒家に吸収せられそれと結合せられたと共に、他面に於いては特殊な思想体系をなさずして存続した。例えは儒家は法家や道家の思想を容するようになつたが、法家の如き思想は實際政治家の裡には常に存在していたし、道家のは或は神仙説や隠逸思想の如きものと結びついて、或は詩人の空想を助けるものとして、長く後に伝えられたのである。ただそれらが特殊の学派として儒教に対抗しなかつたのみである。さて、こういうようにして権威ある思想が一度かたまると、それから後はその権威がいつまでも続いていって、それに対する反抗も生ぜず、その権威を疑うものも出なかつた。シナには思想革命といふものはかつて起つたことが無い。これはシナ人の生活そのものが固定していたからであるが、しかしながらその傍には、思想は思想としてのみ権威を有つていて、必ずしも実生活を支配しようとしたから、という理由もあることを注意しなければならぬ。道徳や政治の教説はいかにもあれ、實際の社会も政治もそれとは無関係に動いてい、それでありながら教説は教説として思想の上に権威を有つていたのが、シナの状態であるが、実生活の上に権威の無い思想に対する反対したりそれを変革しようとしたりする必要が無いからである。

シナ思想を説くことや煩冗に過ぎたようであるが、それはおのずからかかる思想が日本人にとって如何なる意味を有するものであるかを暗示する用をなしたであらう。そうしてまた後に至つてこの一章の所説の回想せら

れるばあいがしばしば生ずるであらう。

3 シナ思想のうけ入れかた

日本人がシナ思想を知ったのは、主として、というよりは殆ど全く、文字を介し書物を介してであった。はじめにはクダラ人や少數の帰化シナ人によつてシナの知識が齎らされたにしても、いくらかの説話などが口から耳へ伝えられた外は、やはり概して文字と書物とによつたものと考えられる。それより後に於いてはなおさらである。だから、それについて第一のしごとは、シナの文字を読みその意義を知ることであったが、その自然の傾向として、或るまつた思想、例えば道德や政治に関する儒教の教説の如きもの、を理会するよりは、一々の文字に現われている断片的な知識を得ることが主となり、或はそれが先だっていたに違いない。日本語とは全く性質を異にするシナ語の表徴であり、その点に於いて特殊の発達を遂げた煩雜なシナの文字を学びそれを知ることは、日本人にとっては特に困難であつて、それがために大なる力を費さねばならなかつたこと、またまとまつた思想を理会するだけの知識上の準備に乏しかつたはずであることも、この推測を助ける。但し、一々の文字の意義を領解するにしても、日本人みずから知識に存在している事物もしくは観念によつてそれを類推するのであるから、それによつて得た文字上の知識には原義に適応しないことがありがちであつたろうが、もしそれが正しく領解せられた場合には、その知識によつて逆に、それに対応する日本人の思想が変改せられるようになる。例えば天地という熟字をアメツチと訓んだらしいが、日本語のツチは天に対する地とは必ずしも一致しないものであるから、この訓みかた、即ち領解のしかたは妥当ではない。けれども天地という文字が熟知せられ慣用せられて來ると、ツチに地の意義が与えられるようになる。ところが、日本人にはアメとクニとの対立した觀念があつて、クニもまた地とは意義が違うけれども、そこに類似する点があるため、この二つが混淆して考えられ、日本紀の神代の巻に例のある如く、クニの語に地の字をあてる場合も生じた。従つてまたアマツカミ・クニツカミという語と天神地祇とが同一視せられるようになり、政治的統治者と服属者との称呼であつたアマツカミとクニ

ニッカミとが宗教的意義に転化して、天上の神と地上の神とをさすことになった。こうなると、単にシナの文字の媒介によって新しい意義が在来の日本語に附加せられ、或は日本語の意義が変化したばかりでなく、シナ人の神の觀念が日本人の宗教思想に入り込んで来たのである。これは一つの例であるが、シナの文字を用いることによつて日本人の思想が変化して來た経路は、これでも知られるはずである。

しかしシナ思想は当時の日本人のよりは程度の高い文化の所産であるから、その思想の写されている文字に対応する日本語の無いばあい、従つてシナ語をそのままに学びそのままに用いなければならぬばあいが多い。シナの書物を多く読むに従つて新に得る知識が豊富になり、特に従来の日本人の思想に存在しなかつた道徳や政治に関する觀念が新にそれによつて与えられるのであるが、それにある日本語が無いのである。そうしてそういう文字の意義を領解するには一層多くの書物を読み一層多くの文字を知ることが必要になって来るが、書物によつて新しい知識を得ようとする一般の欲求はおのずからそれと一致する。そうなると、求めるところも与えられるところも、おのずから一々の文字の知識にはどどまらなくなつたはずである。ところが、シナの書物の多くは断片的に種々の知識が記載せられているのであり、古典の解釈法の如きも上に説いたようなものであるから、或る思想を全体として把握することは困難である。シナ人に於いてもそうであるから、日本人が外国語たるシナ語とシナの文字とによつて自分らの知識に存在しない、或は親しみの無い、思想を理会することの困難は、一層である。だから、シナの書物に習熟するようになつてからも、それから得るところは多く断片的の知識に過ぎないのが一般的の状態であった。従つてまたその知識は表面的であり、文字に記されていることを文字のままに多く知るだけのことであった。だから、学者のしごとはシナの学者と同様、或はそれよりも一層、博覧強記をつとめるのが主になつて来る。その結果、断片的の種々の知識を外面的につなぎ合わせることはできても、その意義を深く考究する力は養われない。そうしてそのことはそういう知識の應用のしかたの上からも知り得られる。懷風藻の序にテンチ（天智）天皇に関して「受命」の文字が用いてあるが、これは儒教の政治理論に於ける受命の意義を明かに知らなかつたものと考えられる。受命は天命をうける義であつて、天命によつて王位につくということ

は、神代史の物語に説かれている日本の皇位の由来とは一致しないものであるのみならず、それには上に述べた如く革命の思想が必然的に伴っているが、当時の学者にはそれがわかつていなかつたらしい。ゲンミヨウ（元明）天皇即位の時の宣命に天地の心を畏みて位に即かれたということが見え、天平宝字八年や天平神護元年の宣命に天太子の位は天もしくは天地の授けるものといつてあるのも、また受命と同じシナ思想であつて、神代史の精神に背くものであるが、宣命の起草者は、多分深く考へることなく、かかることを書いたのであらう。書紀の資料となつた旧辞の潤色者もしくは書紀の編者が、神代の物語を叙するに當つて天地を長久とし無終とするシナ思想を採つたところがあるのは、神代史の精神を一層強める用に立つたのであるが、受命の語の如きは、それとは違うから、その意義が正しく領解せられていたならば、みだりにいい得られなかつたはずのことである。然るにそれが無造作に、或はむしろ得意氣に、書かれたのである。

シナの書物から得た知識が断片的であり表面的であつて、当時の学者が思想を思想として真に理会することがむつかしかつたということには、他にも種々の理由があるので、その一つはシナ文（漢文）を書くのが学者のしごとであつたことである。初めて日本人がシナの文字を知り文字というものの便利なことを知つてからは、その文字がシナ語の表徴であり從つて言語の性質の全く違つてゐる日本語を写すには極めて不適当なものであるにかかわらず、それを用いて日本語を写しそれによつて日本人みずから思想を表現しようとした。文字の知識はシナのを取つたけれども、表現しようとしたことは日本語と日本人の思想とであつた。古事記の如き書きかたの生じたのは即ちこれがためであつて、後世には伝わっていないほぼタイカ（大化）前後ごろまでの普通の文章は、概ねそれであつたと考えられる。（シナ文を日本語化して読む日本人に特殊な読みかたは、ここから出たのである。）ことばとしてシナ語を学ぶのではなく、文字に書かれたシナ文の意義を解するのが主旨であつたからでもあるが、シナ文字を用いて日本語を写す習慣がおのずから、シナ文字とそれによつて書かれたシナ文とを日本語の写されたものでもあるかの如くに取扱う態度を養わせたからだ、と思われるからである。このことについては、日本人はシナ文字を用いても、その複雑にして変化の多い声音を著しく単純化して、日本語と同じ感じを生ずる

ようにしたことが注意せられる。）ところが、シナの書物を読むことまたそれによって知識を得ることが多くなるに従い、そういう知識またはそれによって養われた思想をシナ文で書きあらわそうという欲望が生じて来たのと、シナの文物を尊重しいろいろの点に於いてそれを模倣しようとする知識社会の一般の風尚とから（一方では実用的文章として、他方では日本語によらねばならぬ歌謡などに於いて、上記のような書きかたが後までも行われていながら）シナ文を作ることが次第に多くなつて來た。これがタイカの革新のころから始まり、それから後ますます盛んになつて、ナラ朝からヘイアン朝の初めにかけて一たびその極に達した知識社会の風潮であつた。そうしてそれは、時によつていくらかずつの変化があつたが、エド時代に至つてまた復活したことである。特にヘイアン朝までは官府の公文にも法令にも記録にも、すべてシナ文が用いられたので、それを起草し記録することはすべて官吏の地位にある学者の任であつた。ところがシナの文字そのものが極めて繁雑なものである上に、文字により書物によつてのみシナ文を学び、そうしてそれを書くことに習熟するのは、甚だ困難であつた。こういうシナ文は日常の口語とはいいろいろの点で違つていたが、ともかくもそのもとは外国語たるシナ語であるから、口に語り耳に聞くシナ語を解せずして、文章として筆にのみするシナ文の書きかたを、而もそれを日本語化して読みつつ、摸作する困難は大きかつた。だから、学者はそれがために殆ど全力を費さねばならなかつた。と、同時に文を学ぶためにもその資料を得るためにも博覧強記をつとめねばならなかつた。実務的であるべき記録や公文にすら古典的な文体により、故事成語を多く用い、文辞を修飾することにつとめたのであるが、それは一つは模範としたシナのそういう場合の文体のためであり、学者と文人とが区別せられていなかつたためでもあると共に、一つは本来外国语たるシナ語によるのであり、そのシナ語とても生きた口語としてのそれではないから、実務に適しない点に於いては、如何なる文体でも同じであつたからでもあろう。或はそういう文章を書くことによつて、筆者は自己の能力をあらわし、官府としてはその文華を示したのであろう。

ともかくも、かかることに全幅の力を注いだのであるから、当時の学者は記誦をつとめるのみであつて、シナの思想を思想として理会するいとまが無かつたのである。ヘイアン朝の初期に編纂せられた経国集にナラ朝前後

の学生に対する試験問題とその答案との幾篇かが載せてあるが、それを見ると、忠と孝と何れを先にすべきか、周孔の教と积分者の術との同異真訛如何とか、または天地の有始無終を説く儒家の説と世界の成住壞空をいう仏家の教との優劣を論ぜよとか、いう問題があるから、こういう思想上の問題が人の注意に上っていたことは推知せられる。しかしその答案を読むと、徒らに華麗な文辭をつらねてゐるのみで、論旨は極めて浅薄であり曖昧であり、或は茫漠としていて殆ど理路が立っていず、中には同異真訛をいうことができぬというようなことをいつたものさえもある。あれほどに美辞麗句を連ねる知識と技能とが養われていながら、思索の力の甚しく貧弱なのに驚かされるが、それも一つは、そういう知識技能を養うことにも全力が費されたからでもある。思想上の問題が注意せられたのは、そういう問題がシナの典籍によつて与えられたためらしい。上に挙げた一二の例から考へると、仏家や道家の思想が儒家のと同時に伝わつていて、人がその何れをとるべきかに迷つたというようなことがあり、それに刺戟せられた氣味があるかも知れぬが、それもまたシナ伝來の問題であつたとも臆測せられる。といふのは、当時に於いては、儒家と仏家との間に思想上の衝突や闘争があつたような形迹が無く、万葉巻五に載せてあるオクラの詩序に「引導雖二、得悟惟一」といつてある如く、兩者道を異にするも帰するところは同じであるというような妥協的見解が、知識社会の一般的の傾向であつたよう見えるからである。神護景雲元年の宣命に祥瑞の出現を仏と日本の神々及び歴代天皇の御靈との賜としてある如く、シナ思想と仏教と日本人の信仰との協力をさへ考えたのが当時の思想であつた。儒家の説と道家のともまた相悖ることなく人の知識に存在した。時にその優劣をいうことはあっても、必ずしも相反するものとはしなかつたのである。クウカイ（空海）の著作の三教指帰には仏教を揚げて儒道二教を抑えてあるが、これは作者が僧徒だからである。（この優劣論も、世間的道德の教である儒教と出世間法を説く仏教と長生不死をいう道教とが、根本的にそれそれ立ちばを異にしていることを明かにした上で比較ではなく、さりとて一の立ちばを取つて他の立ちばを排するのではなく、比較すべからざることを極めて無造作に比較したに過ぎない。）そうして一般の状態がこういう風であったのは、何れの思想も單に与えられた文字の上の知識として存在するのみであつて、自己の生活に融合せられず、従つて思想として

深く玩索せられ討究せられたのではないからである。忠孝の如き実践道徳の問題でありながら、日本人の実際生活に關係させてそれを考へていないので、この故であろう。

シナの書物を多く読みながらシナ思想を思想として思索し理会することができず、全体に思索の力が乏しかつたことについては、なお前章に述べた如く、シナ思想そのものが深い思索から出たものでなく、シナ語シナ文が思索には適しないものであるということが、注意せられねばならぬ。シナ語シナ文によつて表現せられてゐるシナ思想そのものが、人の思索を導きその力を養い得ない性質のものなのである。次には日本に伝えられたシナ思想に於いてその最も主要なるものというべき儒家の説は、道徳及び政治の教であつて、初めから教としての權威を以て人に臨むものであるから、それは遵奉せられることを要求するが思議せられることを望まないものであることを、考へねばならぬ。また教であるとすれば、それは実践的のものであるから、全体としての思想体系の如何はもとより、一つ一つの問題についてもその思想的意義の如きは、本来、考えられなくてもさしつかえが無いものである。だから、この意味に於いてもシナ思想そのものに思想として玩索せられない傾向が伏在するのである。勿論、実践を要求する教ではあるが、日本人は文字により書物によつてそれに現われている思想のみを知るのであり、そうしてまたシナ人の実際生活をば全く知らなかつたから、その思想が実際の生活と如何なる関係にあるものであるかがわからず、従つてこの点にもその思想の眞の意義が領解せられない理由がある。シナ人にとっては、その教が教のままに実行せられないものであるにしても、何の点かで実際生活と交渉のあることが知られているけれども、日本人にはそれが無いのである。例えは政治上に於ける天命とか革命とかいう觀念は、易姓、即ち王室更迭、の事實を肯定する辭柄に過ぎないにしても、王朝の更迭は現実に行われてゐることであるから、その辭柄の意義とそれが必要である理由とがシナ人には理会せられるけれども、日本人にはそれができないのである。或はまた一般の道徳觀念とともに、その具体的表現であり実践的規範となるものはいわゆる礼であつて、その礼はシナ人に於いては實際の風習とひどく離れないところのあるものであるのに、日本人は初めから儒教のそういう礼を学ぼうともせず、また生活のしかたの全く違つてゐる日本人にはそれは学ぶことのできないも

のであったから、礼をとおしてその根柢にある道徳観念を理会することもできなかつた。実行するところに意味のある礼が、日本人にはただ書物の上の知識としてのみ知られたのである。が、それと共に他方では、文字に記され書物に説いてあることがそれだけで十分の意味のあるものであり、従つてまたシナの書物に記されいるといふことが即ちそれに無上の権威のあることを示すものとして解せられ、それを絶対視するようになる契機もそこに存在する。そうしてこのことは、すべての点に於いてシナの文物を尊重し、それを学びそれを摸倣することに邁進しなければならなかつた時代の一般的風潮とも相応ずるものである。自己の有つているものよりも優れているシナの文物に接してそれに驚歎し、逐次に伝えられる新事物新典籍がますますそれに対する尊信の情を深めて来た時代に於いては、思想の点でもすべてがそれに圧倒せられたのは当然であり、それに対する批判が許されなかつたのである。別の見かたをすれば、当時に於いてはシナ思想を批判するだけの力が日本人には養われていはず、それだけの程度に日本人の頭脳が進んでいなかつたのでもある。ところが思想を思想として把握しその真意義を理会することは、批判的態度を以てそれに対することによつてはじめてなし得られるはずである。こう考えると、日本人がシナ思想を真に理会し得なかつたのは、当時の日本人の文化の程度にも一つの理由があつたといわねばならぬ。実際、ナラ朝人やヘイアン朝人に対してもシナ思想の正当の理会の無かつたことを怪しむのは、怪しむ方がむりなのであって、文字の上の知識をあれだけに書物のうちから求め得、またシナ文をあれだけに摸倣し得たことに対する十分の敬意を表すれば、それでよいのであろう。日本人はシナ思想をうけ入れるに当つて取捨選択を誤らず、学ぶべきものは学び学ぶべからざるものは学ばなかつたというような俗説は、事実に背くことの大なるものである。シナ思想の取捨選択をするには、シナ思想そのものを十分に理会した上でなくてはできないはずであるのに、その理会がまだよくできなかつたのである。

だから、日本の事物についても、シナ思想を標準とし或はその型にあてはめて取扱うのが一般の状態であつて、その思想が日本の事物そのものまたは日本人の思想なり生活なりに適合するかどうかを、深く考慮することができなかつた。上の例でいうと、祭祀の対象たる神を天神地祇の区分にあてはめるために、イセとかヤマシロ

のカモとかの神は天神でありヤマトとかカツラギのカモとかの神は地祇であるという、令集解に引いてある古記の説が生じたが、実際の信仰に於いても、祭祀の儀礼に於いても、これらの神々の間に天神であり地祇であるとしての区別は無かつたから、これはシナ思想の型にあてはめるために、事実としては存在しない区別を文字の上で設けたのみのことである。皇位を天の授けたものとするのも、シナ思想によつて皇室の地位を解釈し、それをシナの帝王と同視したものである。日本紀の神代の巻のはじめに淮南子や三五曆記に見える天地剖判説（宇宙の太初の渾沌たる状態から天と地とがわかれたという一種の開闢説）が写し取つてあるが、シナのこの剖判説を神代史に結びつけることは日本紀編纂の時に始まつたのではなく、それよりも前からのことであつたらしい。ところが、これは神代の物語の出発点をなすイサナキ・イサナミ二神の国産みの物語とは何の縁も無く、それとは矛盾しているものであるのみならず、二神の前に神々の現われたという話とも一致しないものである。それにもかかわらず、この説が結びつけてあるのは、当時の学者が剖判説をそのまま事実と考え、神代史では大八島のはじまりが語られていても天地の起源に関する説話が無かつたため、それを神代史の最初につけ加えたまでのことはあろうが、国産みの物語とそれとが如何なる関係を有するかをも考えずして、或は考えることができずして、シナ思想をあてはめたものには違ひない。日本の四季のうつりかわりがシナの中原のと一致せず、それよりも約一ヶ月ぐらいたつ後れているにかかるわらず、シナの曆に於ける四季の区分をそのまま適用し、それが恰も実際の四季の変遷を示すものであるが如く考えたのも、それと同じであるが、日常の経験に於いてこれほど明確に知り得られることについてすらそうであるから、思想上の問題についてはなおさらである。（四季の問題は曆に関することであるから、この齟齬をなくするには、曆と四季とを離してしまふか、然らざれば曆の立てかたを変えらるか、何れかの方法によらなければならぬが、前者については曆と四季とを結びつけて考えるシナ思想から脱却することができず、また後者についてはそれほどに曆の学が発達していなかつた。そして、こういう齟齬が如何にして生じたかをあやからにしてそこから曆法の研究に入りこもうとしなかつたところに、当時の日本人の知識欲の方向が現われている。知識欲はあつたけれども、それは書物から与えられる知識を多く蓄えようとすることで

あつたのである。）ヘイアン朝に入つてからも同様で、*积日本紀*に引いてある日本紀の私記を見ると、日神が女性で月神が男性であるのは陰陽の義に適合しないではないかという問と、それに対して本朝神靈の事はシナの説と同じでないという答とが記してあるが、これは神代史の物語を陰陽説にあてはめて考えようとして考へ得られなかつたため、神靈の事に託して思索を回避することを示すものであろう。神道を「不測」といつて易伝の語を借りたり、神代の物語に例の多い八の数を易の卦が八つであるということによつて説いたりしてあるのも、シナの書物から得た知識によつて日本の事物を解釈しようとしたものである。易伝に「神」または神道という語はあるが、その「神」は靈妙なる存在またはたらきという義であり「神道」は自然の理法をさしたものであつて、日本のカミや民俗として宗教的信仰とは、何の関係もないものであるし、八の数を重んずる日本人の風習が易の八卦とかかりあいのないものであることも、また明かであるのに、それがこう取扱われている。旧事紀のヨモヅヒラサカの物語の条に、これは臨死氣絶の際をいうのであつてそういう場所があるのではない、という説が記してあるが、この説はシナ式合理主義によつて説話を解釈したものであり、神代の物語の全体の意味を解しないものである。（この説は日本紀にも見えてゐるが、それは旧事紀の文の攬入と解すべきである。）古今集の序に於いて和歌に道徳的もしくは政治的意義が附与せられ、またその六義が説かれているのも、歌の学者がシナの詩の法則を移して和歌の法式としようとしたのも、これと同じであり、何ごともシナ思想の型にあてはめて考へる外に考へかたが無かつたためである。但し和歌の問題については、事実、和歌がそういうものであり或はそういう法則の下に作られたのではなく、知識の上でそう考へ或はそう取扱おうとしたのみであるから、この考へかた取扱いかたは事実に背いてゐるものであるが、そのことがはつきり認識せられていなかつたらしい。シナの知識によつてそう考へそつと取扱うことが、即ち事実そつてあることである如く思われたのである。それほどにシナの書物によつて与えられた知識が知識社会の思想を支配していたのである。

しかし、思索の力は養われずシナ思想に対する批判はできなかつたにしても、年を経るに従い、長い間シナの書物に親しみシナの知識を蓄えて來たにつれて、シナ思想の理会は次第に正しくも深くもなつて來たに違ひな

い。ただそれは習熟の結果おのずからそうなつて来たのであって、思索により思想を思想として研究することによつて得られたのではないことを、注意しなければならぬ。論理的でない、精緻な思索から出たものでない、シナ思想については、特にこのことに意味がある。従つてまたそれは、与えられた思想を与えられた思想として、またシナ人の考え方によつてシナ思想を、理会するにとどまるのである。だから、こうしてシナの知識を得、シナ思想を領解して来たことが、一般的に日本人の智能を進める効果を生じたには違ひないが、シナ思想を批判し、或はシナ思想に誘われながらそれから脱却することによつて、それに対抗し得るような思想を、日本人みずから的生活から、生み出すことはできなかつた。実践的であることを主張するシナ思想は、日本人みずからの現実の生活を直視することによつて批判せらるべきであるが、シナ思想にあてはめてすべてを視ようとする態度からは、それができない。そうしてそれができなければシナ思想から脱却することができない。だから当時の日本人は、思惟の形に於いて自己の生活を反省しそれを整理して何等かの思想体系を作り出すには至らなかつたのである。シナ思想のほかにシナ化せられた仏教思想も学ばれたが、本来の仏教思想そのものの論理その考え方たはシナ風でないにかかわらず、シナの仏家の考え方の思惟のしかたにはシナ風のところが多く、シナ語シナ文によるばあいにはどうしてもそうなるのであるから、シナ語訳の経論もしくはシナ人の述作によつて仏教思想を学んだ日本人的その学びかたは、シナ思想に対するのとほぼ同じであった。従つてそれもまた概ね与えられた知識として受入れられるにとどまり、日本人の思索のしかたを尊くには至らなかつた。のみならず、仏教教理の説きかたが余りに煩瑣であり、またそれに特有の型があるために、それを学びそれに通ずるものは僧徒、特にそのうちの少数の学匠に限られ、従つてそれは広く一般の知識社会を動かすに至らなかつた、という事情もあるらしい。

一般にはただ仏徒によつて与えられた知識を知識として有つてゐるに過ぎなかつたのである。従つてそれもまた日本人をしてシナ思想の拘束から脱却せしめる助けとはならなかつた。こういう状態であつたから、シナに模範をとつた令の制度の精神をくずすことによつて、日本に独自な政治形態としてのいわゆる摂関政治の機構が作りあげられ、それと共に独自の文化が貴族の間に次第に形づくられて來たハイアン朝の中期以後も、民衆を背景と

して漸次興隆して来た新勢力としての武士が、その摂関政治をうけついだものとして、やはり日本に独自な幕府政治をうちたると共に、文化の武士化民衆化が徐々に行われるることによって日本の文化の根柢がますます深くなつて來た、カマクラ時代以後に於いても、シナ思想に対する態度には依然として変りが無かつたのである。ヘイアン朝末期に於いて朝儀が昔のようでなくなつたとか官序の規模が失われたとかいうようなことは、思想的にはシナ的儀礼シナ的政治觀念からの解放を意味するものであり、シナ風の国史の編纂が行われなくなつたことなどもやはり同様であつて、それに代つて大鏡などの日本文の史籍が出現し、日本人の創意による歴史の一形態が成り立つたことに、大なる意味があるが、それとても政治的情勢の自然の推移によるものであり、また意識してシナ思想を排除しようとしたのではない。そうして知識としてシナ思想が依然として尊尚せられていたことは、上記のような意義を有つていた幕府政治の下に於けるカマクラ時代以後の日本文の著作に於いて、シナの成語や故事が多く用いられていることからも、またそのころになつても学者としてはシナ文で書くべきものとせられてゐたことからも、明かに知られる。ただ長く戦乱がつづいて来ると、一般に学問の権威が軽くなり、社会状態の変化につれて学者の地位も状態も變つて來たが、その代り、禪僧によつて新しくシナの学問が伝えられシナ崇拜の思想が鼓吹せられた。エド時代になつて平和が回復せられると共に、禪林の間に行われていた学問が世間に現われ、新しい形をとつて興つて來たので、そこで再びシナ思想が新たに生じた知識社会に権威を有つようになつた。

エド時代のシナの学問は文辞と記誦とに重きを置いた昔の学問とは違つて、道徳及び政治の教としての儒教の本色を鮮明にしようとしたものであつたから、書物によつて学ばれた思想ながら、第二章に述べたような儒教そのものに固有な宗派的精神がそこにはたらき、学者はみなその奉ずるところの教説によつて世と人とを指導しようとすると共に、それに違背する思想を論難してやまなかつた。道の争がそこで儒家と然らざるものとの間に、もしくは儒家の諸学派の間に、生じたが、かかる争があつたにもかかわらず、当時の社会と生活とをシナ思想の型にあてはめて考え、またはシナ思想によつて批判することに於いては、概ね一致していた。武士をシナの士大

夫の士と見なし、士の道徳的責務として説かれていることを武士に要求したのも、皇室と幕府との関係を王霸のそれと考えたり、將軍を王と書いて喧しい名分論をひき起したり、または思想の上で革命説を是認したりしたのも、或はまた多くの儒者が礼樂制度を定めることの必要を論じたのも、みなそれである。私道徳の上に於いて當時の風俗であつた異姓のものを養子とし同姓のものを娶ることを非難したのも、同じことであつて、道といふものはシナの教の外には無いと考えられたのである。シナでは血統の絶えることは罪悪とせられ、また同姓を娶らずという法則があるからである。日本には昔から宗教的儀礼としての祖先崇拜の風習が無かつたのに、儒教の礼の説を根拠として、祖先を神として祭るべきであるとか神のうちで祖先の靈が最も尊いとか説くものが少なくなつたのも、同じ例である。こういう状態であったから、シナは道の行われている国でありシナ人はみな聖人君子である、とさえ漠然ながら考えられてもいたようであつて、史籍を読むに及んでシナ人にも邪惡の徒があることに始めて気がついた、と珍らしげにいつた学者もある。書物によつてシナの教を知つたのみでシナ人の生活の実際を知らなかつたのと、教というもののあることがそれの行われていることであると考えられたのとの、故であらう。道徳や政治の問題でないことについても、その準拠するところはシナ思想であつたので、ハクセキなどが神は人なりといつて神代の物語に合理主義的解釈を加えたのもそれであり、ミウラバイエンの企てた一種の形而上学的宇宙論を構成するにも、シナの陰陽説などを用いシナ風の考え方をしたのである。儒者の間にも日本人には日本人の風俗習慣礼法制度があるべきことを説いたものも無いではなく、バンザンの如きはその最も優れたものであるが、それとてもその主張の根拠はシナ思想から出たものであり、その考え方をシナ風のである。シナの書物によつてのみ知識を得るものはシナ人の考え方によつて考える外は無かつたのである。幼時からわゆる素読によつてシナの書を読み習い、長じて後はシナ文を書くことをつとめた江戸時代の儒者は、この点からもシナ風の考え方慣れ、それより外に出ることができなかつたのである。日本語が、単に自分たちの国語であるからといふばかりでなく、ことばとしての性質の上に於いて、シナ語よりも遙に思索に適し理を説くに適するものであるのに、その日本語を用いることを軽んじたのは、学者たる能力がシナ文を書くことによつて示さ

れるが如く思われたからであるが、ここにも一つの理由がある。そうしてそれはまた、この時代の学者とても半ばは文辞の習熟と記誦とがその任務とせられていたこと、随つてまたそれがために思索を妨げられたことを示すものもある。日本人の日常生活に於ける道徳を教えるについてシナ文の典籍たる論語などを読ませることが唯一の方法として考えられたのも、一つはここに由来があろう。勿論その根柢には、かかる經典が宗教的に信仰せられ、またシナの教というものを外から与えられるのでなければ人の道徳が立たないと考えられた儒者の宗派心が存在するが、その教というものがどこまでもシナの文字と結びつけられていたのである。

以上は知識社会に於いてシナ思想が如何なる方法、如何なる形でうけ入れられ、それが彼等の間にいかに権威を有つていたかを見ようとしたものであるが、シナ思想に反抗して日本人の道を立てようとしたものに於いても、またシナ思想が有力にはたらいているので、神道の教説及び国学者の見解が即ちそれである。次にそのことを考えてみよう。

4 神道及び国学に於いて

日本紀の神代の巻をシナ思想によつて解釈することは、ペイアン朝の朝廷の講説に於いて既に試みられたことであつて、上に一二の例を挙げた如く、釈紀に引いてある種々の私記の断片によつてそれは知られる。その方法は、神代の巻の或る記載の意義を考えるばあいに、文字によつて、外觀上それに似ている、或は関係のありげな、シナの思想を附会することであつて、こうすることがすぐに問題の解釈になると思われたのである。上に述べた例でいうと、易に八卦があると説くことによつて八の数の由来なり意義なりが解釈せられたとする類である。しかし、これは本来、日本紀という書物の講義であるから、シナ思想とても、その一々の記載について考え出されるのみである。この方法はカマクラ時代に書かれた釈日本紀の著者自身、もしくはその時代の日本紀を講ずるもの、によつても用いられたので、陰陽説や五行説によることが私記時代よりも多くなつてゐるようではあるが、取扱いのかたは同じである。ところが、同じ時代には、仏教の教説に対立する意味に於いての宗教思想の体系とし